

---

# 無限のナイトメア

高月望

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無限のナイトメア

### 【Zマーク】

Z7683Y

### 【作者名】

高月望

### 【あらすじ】

あなたはどんな夢を見ますか

高原いつきは普通の高校生。そんないつきの前に現れたのは美少女の転校生だった。しかし、それを境に見始める悪夢。その悪夢は学校中に広がりを見せ始める。一体何が起きているのか。転校生の彼女との関わりは。いつきの友達をも巻き込みながら、悪夢の六日間が始まる。初めて書きます。拙い文章ですが、暇つぶしにでもどうぞ。感想などお待ちしています。

## プロローグ

「……見つけた、見つけたぞ」

その声はまるで地の底から聞こえてくるような低く、重い声だった。だが、その声は歓喜に満ち溢れていた。それは長年探していたものが、見つかったかのように。

しかし、私は声の主を見つけることができないでいた。

何故なら、ここは闇しかない真っ暗な空間だったからだ。

私は、そんな闇の中を、あたかも暗い海の中に浮かんでいるような、そんなふわふわした感覚で漂っていた。

「見つけた、見つけたぞ」

「……誰だ……？」

私は声の主に問いかげた。

「私にはない。しかし、お前にとつて救世主となりえるだらう」

「……どうこうことだ？」

「どうもこうもない、言葉のままだ。ふふふふふふふふ」

私は次第に恐怖を抱き始めた。さつきまでのふわふわした気持ちが、だんだんと覚め始めているのを感じる。この声を聞いてはいけないと体が、心が、反応している。しかし、声の主はそんな私に気付いているのかいないのか、さつきよりもまして低く、重い声で、しかも優しく問いかける。

お前の願いをかなえてやるわ……と。

相手の姿は見えないのに、それは耳元でささやかれたような感覚だった。心が揺れているのを感じる。まるでそれは悪魔のささやきだ。声の主が何者なのかもわからないところに、私はその魅力的な提案に惹かれている。それほど私は欲しているのだらう、自分の

願いがかなえられることを。

「さあ、望め！望めばその願いがかなえよう」

「……はい……」

僕は急いでいた。

なぜ急いでいるかといつと簡単なことだ、遅刻しそうだから。朝遅くまで寝ていたせいで、いつもより遅い時間に出る羽目になつた。走つて学校に向かう。

僕の通う高校は住宅街の中にあり、その利便性と制服のかわいさから人気の学校となつていて、大きさは全校生徒六百人といつまあま大きな学校である。一応、進学校である。

そんな学校への通学路は、鳥のさえずりに加えて、登校する同じ学校の生徒たちの笑い声が聞こえてくる。今日は天氣も良く、清々しい朝の日差しが降り注いでいた。

僕は立ち止まり、携帯を出し時間を見る。走ったおかげだろうか、十分に間に合う時間帯だ。僕はホツとし、ゆっくり歩き出した。呼吸を整えながら、朝の空氣をいっぱい吸う。清々しい空氣が肺に満ちていくを感じる。差の日差しも春の陽氣を含み、温かく気持ちいい。

そんなポカポカ陽氣で歩いていると、急に首に重みを感じるではないか。見ると首に誰かの腕が巻きついている。その重みで体がだんだんとのぞっていく。しかもその腕はだんだんと自分の首を絞めてつけていく。次第に息をするのも苦しくなつてきた。このままじゃ死ぬ。身の危険を感じ、

「ギブ、ギブ！」

僕はその腕をたたきながら、必死に降参を訴える。するとその腕はすぐにほどけていった。僕は誰だと思い、首をさすりながら後ろを振り返ると、そこには見知った顔があった。

「驚いた？おはよう、高原いつきくん」

満面の笑みで僕にあこさつしてくれたのは、僕にとって数少ない

女の子の友達である雨宮美雨さんだ。彼女はクラス委員長でもある。しつかり者で誰にでも優しく、平等に扱ってくれる人だ。そのためクラスの人たちからの信頼も厚い。頭もよく、学年トップ。その座を今まで一度も明け渡したことがないそうである。

「歩いていたら、高原くんの後ろ姿が見えたから、つい抱きついた。へへへ」

「…むやみに男の子に抱きつっちゃいけません」

「どうして？高原くん、嫌だった？」

「そ、そういうわけ……」

「…分かった、これから気をつけるね」

今会話で分かるように、雨宮さんはひょっと天然なところがある。またそこがかわいいという男子生徒も多くいるらしい。僕もその一人である。

そして僕たちは一緒に学校へと向かうこととなつた。横に一人並んで歩いていると少し恥ずかしい気がするのはどうしてだろう。僕が意識しすぎているからなのだろうと思つけど……

「あ、そうだ。高原くんは知つていてるかな？」

「えつ、な、なにが？」

突然、話を振られて驚く僕。今、自分が考えていたことを思い返し、顔が熱くなるのを感じた。

「あれ、高原くん、顔赤いけど大丈夫？」

「だ、大丈夫だよ。それで何？」

「あ、えつとね、今日、転校生が来るんだよ」

「今日？急だね」

「そうなの。先生がみんなを驚かしたくて内緒にしたいみたい。だからみんなに言つてないんだけど……私は委員長だから教えてもらつて……あっ！しまつた。内緒だから高原くんにも言つのはまずかつたのかな？でも、もう言つちゃつたし……どうしよう」

おひおひする雨宮さん。そんな姿を見て僕もおひおひしながら答える。

「い、いや別にいいよ。ただ今日の転校生が来るというサプライズがサプライズではなくなつたって言うだけだし、大した損害ではないよ。それのみんなが知らないことを知っているといつ優越感があるていいと思うし」

「ご、ごめんね…」

「あ、謝るようなことじやないよ」

「で、でも……」

本当に申し訳なさそうに謝る雨宮さんの姿に、僕もどうしていいか分からずになっている。いつも時にしゃんとフォローできる人間になりたいと思うが、今の自分ではそういうはず、あわてて話題を振つてみる。

「で、転校生って男？女？」

「…話では女の子だよ」

「女の子か……」

「高原くん、何か企んでいる？」

「なにを言っていますか。企むことなんてないよ、どつかの誰かさんとは違つて」

そうこうしているうちに学校に着いた。

僕たちはそろって一年三組の教室へと向かつ。教室の前まで着くと中から楽しそうな話し声が聞こえてくる。僕はドアに手をかけ、開き、一人で教室に入ると、

「おっや～お二人で登校ですか～？」

聞き覚えのある、ふざけた声がした。

「おはよう、龍臣

「おはよう、いつき」

田の前にいたのは僕の悪友、瀬田龍臣である。茶髪にピアスといついで立ちに、ナンパな性格も相まって、問題児の一人となつている。でも、根はいいやつで一緒にいると楽しい。

「おはよう、爾富さん。今日もかわいいね。今度一緒にデートでもどう？」

「おはよう、瀬田くん。いつも元気だね」

「もちろん、瀬田龍臣はいつも元気ですよ～…痛い、なにすんだ

～

ドヤ顔の龍臣を、僕は一発殴り、席へと向かつ。

隣の席には川島明人くんが座っていた。

川島くんは、端正な顔つきと寡黙さが、女子には人気となつている。僕とは席が隣同士ということもあり仲良くなり、ちょくちょく一緒に帰つたりする。

「おはよう、川島くん」

「おはよう」

僕は改めて川島くんの顔を見て、ぎょっとした。その顔には生氣がなく、青白く、まるで死人みたいだった。僕は驚き、声をかける。

「だ、大丈夫？ 川島くん。顔色が悪いんだけど……」

「大丈夫」

「で、でも……」

そこに龍臣もやってきた。

「うわ、川島、大丈夫か？顔色すりごく悪いぞ」

「大丈夫」

「大丈夫じゃねえよ」

僕は再度、川島くんの顔を見た。その顔は本当に生気がない。周りの人が心配になるぐらい顔色が悪いのだ。

「風邪でもひいた？川島くん」

「いや、……悪い夢を見たんだ……」

「……夢……？」

僕が再びどういうことか尋ねようとしたとき、ちょうど先生が教室に入ってきた。

「こらこら、席に着けよ～」

その声をきっかけに、生徒たちが次々に席に座っていく。僕も仕方がないに席に座るが、僕の目線は川島くんのほうをちらちらと見つめている。友達だから心配なのだ。

「みんな大事な話があるぞ～」

先生がうれしそうに話をし始めた。僕は川島くんが心配だったが、仕方なしに視線を先生のほうにむける。

僕の席は後ろから一番目の窓側の席なので、教室内をよく見渡すことができる。みんなまじめに先生のほうを向いて、その話に耳を傾けている。

「ええと、まず一つ目として、新しい保健の先生が赴任してきました。名前は夢野先生です。前の保健の先生だった山田先生が産休に入られたためです。

次に一つ目ですが、これはみんな驚くと思いますが、うちのクラスに今日、転校生がきます」

「ええ～」

みんなが驚きの声を上げる。クラス内がざわめきだつた。それを

聞いた先生は、どこか満足げにうなずいていた。先生はこういう反応を待っていたのである。すでに知っていた僕は、ただただみんなのことを観察していた。驚き、喜ぶものがほとんどだった。僕は隣の川島くんを見るが、まっすぐ前を向いたままで何の反応もない。やはり顔色は良くなつてはおらず、いまだ青白いままであった。

「さあ、入つて」

先生が廊下にいるだらうその転校生を呼び出した。

「コツコツコツ……」

先生の言葉を受け、転校生が教室に入つてくる。その姿が目に入ったとき、教室のざわめきは一瞬でなくなつた。静寂が教室内を包み込んでいく。

誰もがその姿に目を奪われた。

黒く長い絹のような艶やかな髪をなびかせて、みんなの前に立つた少女に。

大人っぽい中にまだ少女のあどけなさを残した端正な顔立ち、よく見ると吸い込まれそうな黒く凛とした大きな瞳。姿や雰囲気、すべてが美しかつた。制服もまるで、彼女のためにあしらつたが如く着こなされていて、ただ素晴らしいの一言だった。

「夢野夢子です。よろしくお願ひします」

彼女は声も美しかつた。

そんな彼女の声を聞き、クラス内は我に返つたかのように再びざわめきを取り戻した。男子たちはうつとりと彼女を見つめ、女子たちは嫉妬や羨望を超えて、ただただ脱帽していた。

僕もクラスメイトと同じように彼女の美しさに目を奪われてしまつた。

すると突然、

「僕のファインセだ~」

そう言い立ち上がつたのは、だれでもなく龍臣だつた。

「こんなきれいな子がうちのクラスに来るなんて、まさしく運命。僕とデートしてください」

そう言つと周りからは大ブーイングが巻き起こつた。主に男子からで、抜け駆けするな、ずるいぞといった文句であつた。転校生の彼女はというと完全に無視だつた。龍臣のほうさえも見てはいなかつた。がっくしと肩を落とす龍臣の姿は面白かつた。

しかし、転校生が来ることは分かつてゐたが、こんな美少女だつたとは驚きである。雨宮さんのほうを見ると同じように驚いているようだ。やはりこの事実は知らされていなかつたのだろう。

僕は再び彼女に目を戻すと、目があつたような気がした。僕は焦つて、急いで目をそらした。しかし、考えてみると彼女が、僕のほうを見るわけがないのだから偶然に違いないだろう。そう思い、再び彼女のほうを見ると、今度はばつちり目が合つてしまつた。しかも、完璧に僕のほうを見ているではないか。何かの間違いであつてほしいと願うがそうではないらしい。

そんな彼女の視線に気づいたのか、クラスの何人かは僕のほうを見ているではないか。居たたまれない気持ちになり、どうしていい

か分からぬでいると、

「夢野さんの席はあそこだから」

先生がそう言いながら指さしたのは、僕の後ろの席だった。

またクラスの視線が僕に集まる。今日ほど僕自身、注目を浴びた日はないだろう。そんな視線には耐えるしかない。

彼女はその先生の言葉に従い、席に移動し始めた。こちらにだんだんと近づいてくる。近づいてくるたびに僕の心臓は早鐘のように鳴り響いている。美少女には慣れていないのだ。しかし、僕は冷静を装い、何もないような顔で彼女が通り過ぎるのを待つた。

だが、そんな僕の気持ちを裏切るかのように、彼女は僕の席の横で立ち止まつたのだ。そして、目を丸くし驚いたような表情で僕を見つめてくる。そんな表情もきれいだなと思いつつも、僕はその視線に耐えきれなくなり目をそらす。

すると突然、身を乗り出し顔を僕のほうに近付けて匂いを嗅ぎ始めたではないか。僕の顔と彼女、夢野さんの顔が近寄っていく。僕は内心パニックを起こしていた。なにが起こっているのかまるで理解できないでいた。教室内もざわめき始めている。顔がみるみる熱くなつていくのが分かる。きっと僕の顔は今、ゆでダコのように真っ赤になつてているであろう。それに加えて男子たちの敵意ある視線を感じながらも、僕は必死に耐えていた、心の中で早く終わつてくれと願いながら。

しばらくすると夢野さんは満足したのか、僕から顔を離した。僕はそれにホッと胸をなでおろす。そして彼女は、席に座つている僕を見下ろしながらこう言つたのだった。

「あなた、私と同じ匂いがするわ」

「どうしてなんだよ～なんでいつきなんだよ～

「どうしてだろうね」

「…するこそ」

「代わってくれるなら代わつてもらいたいけどね…」

放課後、龍臣と一緒に帰ることになった。僕たちは話しながら廊下を進む。廊下は帰る生徒や部活動のある生徒で混雑していた。耳を澄ましていると、どうやらうちの転校生の話をしているのが聞こえる。やはりあの美貌なので、うわさは瞬く間に広がったようだつた。あつちこっちで聞こえてくる。僕は大きくため息をついた。

「おっ、どうかしたか? いつき

「…なんでもないよ…それより、川島くんは大丈夫かな?」

「川島か? あいつ一日中、顔色悪かったもんな。で、さつさと帰つたんだろ」「うん。でも心配だな…」

川島くんのことも心配はあるのだけれど、しかし、僕自身も大変なことになつたのは間違いない。

噂でもちきりの美少女転校生に目をつけられてしまった。

あの朝の一件から彼女、夢野さんは僕のことを観察するかのとく見つめていた。他の人が話しかけても目をそらすことがなかつた。その結果、丸一日中、彼女の視線を感じることとなつた。

一体何が原因なのか、僕にはさっぱり見当もつかなかつた。その間、男子たちからは敵意のこもつた視線を感じたのは言うまでもない。

僕はそれを思い出し、また深いため息をつく。明日もこんな調子だつたらどうすればいいのか。

そんな僕の、玄関へと向かう足取りは重いものとなつていた。し

かし、今日はこれで終わりだ。あとは家に帰るのみ。夢野さんからは解放されるのだ。今日のことはひとまず忘れようと気を取り直し、さつきよりは軽い足取りで玄関へと向かう。

しかし、そんな思いも一瞬で粉々となつた。

玄関には夢野さんがいた。

しかも、帰るそぶりも見せず、誰かを待つているかのようにこちらを向いて立つていた。

「マイスイートバーー！」

龍臣は夢野さんを見つけて、うれしそうに駆け寄つていいく。それに対して僕は重い足取りだつた。まるで、天国から地獄に突き落とされたような気分である。

「どうかしたの？誰を待つているの？暇ならデートにでも行かない？」

龍臣が矢継ぎ早に質問するが、夢野さんは完全無視だ。

僕は努めて冷静に、何事もなかつたかのように龍臣を無視して、夢野さんの横を通り過ぎようとした瞬間、

「やっぱり、あなた、私と同じ匂いがする」

そう、ぼそつと彼女はつぶやいた。

僕はそんな言葉を無視して歩を進めようとした時、何かに足を取られてつまずいた。よく見るとそこには、スラッと伸びたきれいな脚があつた。そう夢野さんの脚である。

「まだ話が終わつてないのだけれど」

僕は目を丸くして、夢野さんのほうを見る。まさか、口を使わず足を使うとは、顔に似合わず恐ろしいことをする。運動神経があまりよろしくない僕である、下手をすれば顔面をぶつけっていたかもしない。少しだけだが彼女の恐ろしい一面を見た気がする。

「僕に何か用ですか？」

僕は猜疑心ばかりで答える。

「どうして私と同じ匂いがするのかしら？」

「言つている意味がわからないんだけど。用がないなら帰るよ。

それにもう僕にかまわないでくれるとありがたいんだけど。じゃあ

僕は、これ以上付き合つてはいられないと思い、足早に玄関を出

ようとする。すると待てよーと言ひながら龍田が付いてくる。龍田

は少し名残惜しそうに夢野さんのほうを振り返る。

すると後ろから声がかかる。もちろん夢野さんだ。

「気をつけなさい。これから不吉なことが起こるから。あなたもきっと関わってくる」

外はすっかり夕焼け色に染まっていた。遠くのほうでカラスが鳴  
いている。

「意味がわからぬ…じゃあ、また明日」

僕は急いで玄関を後にした。だから、夢野さんが最後に言つた言葉を僕は聞くことができなかつた。  
わざとすぐこでも悪夢が始まるわ

夕焼け色の空は、だんだんと闇の色を含み始めていた。春といえども夕方は寒い。寒い風が吹き、夢野さんのスカートをはためかした。

その夜のこと…

そこは真っ暗な空間だった。

風などの音は一切なく、生き物の気配も全くと言つていいほど感じない。そこはまるで墨汁で一面を染めたような深い黒だけが、この空間を形成しているようだった。

闇、やみ、ヤミしかない……

そんな空間に、僕はひとりでいた。

この闇しかない空間の中でも、僕の姿ははっきりと浮かび上がっている。それはまるで僕自身から光を発しているようだった。

そんな僕は、何かに追われている最中だった。ときどき後ろを振り返りながら、全力で走っている。

僕の顔は恐怖でゆがみ、荒い呼吸を繰り返している。その呼吸音と足音だけが空間に響いている。そして振り返っては、自分を追つてきている何かを確認しようとすると、その姿を確認することはできない。

見えない何かに追われる恐怖が、僕を包み込んでいく。

しばらく走っていたが、僕は急に立ち止った。体を前ががみにして、上下に肩を揺らしながら荒い呼吸を繰り返す。ハアハアという呼吸音だけが空間に響いているが、それもすぐに吸い込まれていき、再び静寂が訪れる。

しかし、その静寂を僕の声が打ち破る。

「一体誰なんだよ、追いかけてくるのは。もうやめてくれ」

僕は後ろを振り返って、そう叫ぶが返事は帰つてこない。僕の悲痛な叫びも容赦なく空間に吸い込まれていく。

僕自身も返事が返つてくるとは思っていない。しかし、叫ばずにはこられないほど恐怖を感じていた。気が付いたら真っ暗な空間に

いて、突然見えない何かが後ろにいるのを感じたのだ。誰だつて恐怖を感じずにはいられないだろう。

僕はしばらく後ろを見つめていたが、何の変化もないことが分かると、あきらめた様子で再び目線を前に戻した。

そのとき、ふと誰かに見つめられている感覚を覚えた。その感覚は僕の立つ足元から感じるではないか。寄つて僕の目線は、自然と足元にむけられる。しかし、何の変化もない。僕は気のせいかと思い首をかしげる。そして、視線を戻そうとした瞬間、地面がゆがんだかのように見えた。

「な、何だ……」

僕は目をこすり、再び足元の地面に目を向ける。

すると、地面がぱつくりと割れ、二つの大きな赤い眼が現れ、こちらを見ていいのではないか。

「う、うわあ～」

僕は驚き、腰を抜かし地面に座り込む。

その瞬間、地面にはたくさんの裂け目ができ、無数の眼が現れ始めた。そして、その裂け目は地面のみならず横や天井にもでき、多くの赤い眼が現れる。すると、いつせいに僕を見始めたではないか。この恐怖の中で、どうすればいいか必死に考えたが、頭は回らない。何か身を守るものを持あたりを見渡すが、もちろん何もない。何か武器がほしいと願つたが、その願いがかなえられるわけもない。そして、たくさんの眼は、僕を変わらず見つめ続けている。少し変わったところといえば、眼の数が先ほどよりもくなつたということだらうか。

言ひようのない恐怖が僕を包み込んでいく。

僕は、その眼を見ないようにうつむきながらつぶやく。

「何か武器があれば…バットでもいい、何でもいいから助けて…」  
そうつぶやいたときであつた。



カラーンカラーン……

何かが落ちる音を聞き、僕は顔をあげた。するとそこには一本のバットが落ちているではないか。なぜと疑問に思い、目を丸くする僕だが、そんな些細なことを気にしている場合ではない。

自分の身を守る武器を手に入れた僕は、心強い味方が現れたような気がした。そして、そのバットを両手で握り立ち向かうように構えた。

「うわあ～」

僕は叫びながら、無我夢中でバットを振り回した。それに驚いた赤い眼たちは、その眼を丸くしているが、僕を見つめたまま。僕も僕で、目を閉じたままバットを振り回しているので、当たるものも当たるはずがない。

僕はしばらくバットを振り回していたが、何かに気付きその手を止めた。

コツコツコツ……

足音が闇の向こうから聞こえる。

僕はその方向をじっと凝視するが、何も見えてこない。

しかし、確実にその足音は大きくなっていく。

コツコツコツ……

足音は大きくなり、すぐそばまで迫っているのが分かる。

僕はその音がする方向をじっと見つめていると、人影が見えてきたではないか。そしてその人影は、こともあろうか僕に話しかけてきた。

「予想外のところに来てしまったようだ。だが、ある意味ラッキーだったのかもしれない。君みたいな人間に出会えたのだから。君は少し特殊のようだね」

人影は次第に大きくなり、その姿を現す。

黒いコートに黒いシルクハット、全身黒ずくめの格好だ。顔は帽子を深くかぶつていてよく確認できないが、うすこけた頬が帽子の隙間から確認できる。

僕は気味の悪さを感じた。しかし、そんな僕にお構いなしに、その男はじわりじわりと距離を詰めてくる。

「君は何もない夢の中でバットを生み出した。それはすごいことなんだよ。分かるかな？君、本当に人間なのかな？不思議だね～本当に不思議だ」

男は、僕が手にしているバットを指さしながら、興奮気味にそう告げた。

だが本当に僕には、なにがすごいことなのか理解できいでいた。

バットは僕自身が願つたら出てきたものだ。確かにすごいことなんかかもしれないが、これは夢なのであろう。なにが起こつたって不思議ではないはずだ。だから、男がそこまで興奮する理由が分からなかつた。

「君にはその凄さが分からないか。残念だよ、まったく……」

首をかしげている僕に対し、男は嘆いた。

そして指を伸ばし、僕の眉間に当てた。

すると僕は指が当たつた瞬間、体をびくっと揺らしたが、それつきり動くことができなくなつた。僕はとつと戸惑いの表情を浮かべている。僕は体を動かそうと手足を動かしてみるが、先が少し動くだけで、それ以上は動かなかつた。それを見た男は満足そうに口角をあげた。

「やはり君はとても素晴らしい。しかし私にとつては邪魔でしかないうだろ。だからと言つて君を殺すのはたやすいことだ。だが、殺したりはしまい。私は慈悲深いからなあ」

そう男が告げ、指を強く僕のほうに向かつて押す。すると、そのまま僕は眠るように、目を閉じながら、後ろに倒れていったのだった。

そして、男は倒れた僕を見下ろしながら、こう告げた。

「ああ、言い忘れていたよ。ここで私に会つたことは忘れてもらえない  
とありがたいのだが…ふむ、もう聞いていいか。なら無理矢理  
でも忘れてもらうしかないね。まだ、あいつらに気付かれるのはま  
ずいからね」

男はこういふと、腰をかがめ、倒れている僕の眉間に再び指をあ  
てる。すると僕の体は、先ほどと同じように一瞬びくつと揺れたが、  
その後はまるで何事もなかつたかのように床に横たわっている。

その様子を見た男は、満足そうに笑みを浮かべながら僕を見下ろ  
している。

「これでいい。ふふふふふふふふ…

そして、男は踵を返し、笑い声とともに暗い空間に消えていった  
のだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7683y/>

---

無限のナイトメア

2011年11月27日17時55分発行